

ネコにおけるヒトの情動知覚に関する実験的検討

明日香 瑞穂

瀧本 彩加

ネコは家畜動物の一種であるが、イヌやウマに比べ、ヒトに使役用として使われる機会も、ヒトと共同作業をする機会も少なかった。しかし、愛玩用としてネコは、ヒトのそばに長くいる動物で、長くヒトとともに過ごす中で、ネコもイヌやウマと同様に対ヒトコミュニケーション能力を発達させてきた可能性が考えられる。特に、ヒトの情動シグナルをその表情や音声から知覚できれば、ネコがヒトの行動とのやりとりを円滑にすることができるとの利点がある Galvan & Vonk (2016) から、ネコは、飼い主が怒り顔のときよりも笑顔のときにより飼い主を注視し、接触することがわかっている。しかし、その研究では、ネコが飼い主の音声から情動を知覚するという結果は得られなかった。その理由として、刺激呈示時間が 2 分にも及ぶにもかかわらず、呈示刺激としてライブ刺激を使用していたことが挙げられる。よって、本研究では、演技の質を確保できるよう、事前に撮影・録音して統制された表情刺激・音声刺激を用いて、再検証をすることとした。

本研究では、ネコがヒトの情動を知覚しているのか、またその知覚に親密性が影響するのかを実験的に検討した。実験 1 では、ネコがヒトの表情から情動を知覚するのか、またその知覚に親密性が影響するのかを調べた。具体的には、ネコにとって親密な人と見知らぬ人の笑顔・真顔・怒り顔の表情刺激を呈示し、ネコの反応を調べた。分析した結果、すべての行動指標（注視回数・第一注視時間・合計注視時間・平均注視時間・接近回数・第一接近時間・合計接近時間・平均接近時間）について、情動と親密性の主効果とそれらの交互作用は有意ではなかった。これらの結果は、ヒトの情動やヒトとの親密性がネコの行動に影響しなかったことを意味している。

実験 2 では、ネコがヒトの音声から情動を知覚するのか、またその知覚に親密性が影響するのかを調べた。具体的には、ネコにとって親密な人と見知らぬ人のポジティブ声・ニュートラル声・ネガティブ声の音声刺激を呈示し、ネコの反応を調べた。分析した結果、すべての行動指標（注視回数・第一注視時間・合計注視時間・平均注視時間・接近回数・第一接近時間・合計接近時間・平均接近時間）について、情動と親密性の主効果とそれらの交互作用は有意ではなかった。これらの結果は、ヒトの情動やヒトとの親密性がネコの行動に影響しなかったことを意味している。

以上のように、本研究では、ネコがヒトの表情や音声から情動を知覚することができるという結果を得られなかった。刺激の種類や刺激呈示時間の長さ・実験環境などに関する問題点を改善し、再検討する必要がある。